

三筆三蹟はなぜ三筆三蹟なのか

(1) 三筆三蹟の語られ方について

古市 将樹

要旨：本論は、平安時代の能筆を意味する「三筆」（空海・嵯峨天皇・橘逸勢）と「三蹟」（小野道風・藤原佐理・藤原行成）に関するいくつかの疑問、特に、なぜ彼らが他の能書と比べて別格的な位置づけをされているのかについて、先行研究の状況を整理するとともに、記号学的な観点から、それら「三筆」・「三蹟」の呼称が記号としてはたらくことで、別格的な位置を確保したと考えられることを論じている。現在、これに関しては、「三筆」や「三蹟」が記号として成立し作用する具体的な場面が教育（教科書）に見い出せる。それは、特別な意図を含まない平明な歴史的事実の記述によって構成されているが、同時に、三筆・三蹟の説明文が、「三筆」「三蹟」の呼称を記号化し、書道史的に不明な部分を補って、それらを別格のものとしている状態でもある。本論はこのこと状況を分析・抽出するものであり、本稿はその第一弾である。

キーワード：三筆・三蹟、教科書、記号

はじめに

本論は、私〔古市〕の研究「身体と言語に関する研究—教育の言葉」の一環である。この研究は、教科書の言葉や教育者の話し言葉などの教育言説において、特に意識していなくとも、言葉を通じてものの見方や考え方や価値観などを学習者に身体化させていることを、記号学の知見をもって分析、明らかにすることを目的としている。これまでその主たる分析対象、具体的な内容として、日本の南北朝時代の尊円親王『入木抄』のテキスト分析をおこなってきた。その過程で、日本の書道史上有名な三筆・三蹟（三跡）に関して調べていく中で疑問をいだく状況に直面した。というのも、論題の通り、三筆・三蹟がなぜ三筆・三蹟とされているのかが分からないのである。

この疑問には、いくつかの意味が含まれている。第一に、どのような基準でもって三筆・三蹟が選ばれたのかよくわかっていない。第二に、なぜ空海らが他の書き手と区別されて三筆・三蹟と称されるようになったのか、換言すれば、なぜ他の書き手は三筆・三蹟に入らなかったのかも不明である。そしてこれらの意味の先にあるものとして、第三に、そのような状況であるにもかかわらず、三筆・三蹟は書の名手であるとして位置づけられているのはなぜかと、そのことがどのような意味をもつのか、という疑問がある。

これらの疑問は書道史の研究と関連が深い。しかし、おそらくその分野の研究では説明が難しい部分があり、そこは記号学の知見を用いた教育的な分析が担うに相応しいであろう。というのも、「三筆」や「三蹟」という言葉によって、空海らの、それ以外の能書

三筆三蹟はなぜ三筆三蹟なのか
 (1) 三筆三蹟の語られ方について

たちからの分節化を図ってきたのは教育においてのことだったと考えられるからである。本稿では、このことを考察する第一弾として、教科書や史料において三筆・三蹟がいかにか語られてきたのかを確認し、その語られ方から生じる問題を指摘する。

1. 教科書における三筆・三蹟についての記述

三筆・三蹟の呼称は有名だが、それはなぜだろうか。学校以外の書道教室などの場で書道を学んだ人々なら臨書の手本としてその呼称を知り得る機会が近いところにあったかもしれないが、それ以外の人々は学校の教科書を通じて知った場合が多いと考えられる。もちろん教科書以外の一般的な辞書にもその記載はあるが、たまたまそこに行き着いたような場合でなければ、辞書を通じて初めて知ったとは考えにくい。なぜならば、辞書で三筆・三蹟について知るということは、少なくともその言葉を既に知っていて、「さ」のページを調べたからということになるからである。この場合、いつ三筆・三蹟は知られたのか。それが誰かということや具体的な書（作品）を知らなくとも、三筆・三蹟の呼称を知る機会は、要するに、書道を学ぶのに関係なくとも三筆・三蹟を知るのは、教科書を通じての場合が多いであろう。具体的には、特に書道を嗜んでいなくとも、受験勉強を通じて知ったような場合がそうであるように。

それでは三筆・三蹟は教科書にどのように記されているのか。次の一覧表は、確認できた教科書（高等学校日本史）の内容（三筆・三蹟の記述）をまとめたものである。左端にある通し番号は本論において便宜的に振っており、（後述する〈史料一覧〉においても同様である）。

〈教科書一覧〉

	出版年	書名	出版社		記述（本文）
1	1993年 平成5年	要説 日本 の歴史	自由書房	三筆	書道も唐風がさかんで、ことに嵯峨天皇・空海・橘逸勢は、後世、三筆とたたえられた。(39 ページ)
				三蹟	書道も、流麗で温雅な和風の書がおこなわれ、小野道風・藤原佐理・藤原行成の名手がでて、後世、三蹟とよばれた。(46 ページ)
2	1993年 平成5年	高等学校 日本史	清水書院	三筆	貴族の教養としての漢文学は、さらにさかんになった。文人としても名高い嵯峨天皇の宮廷を中心に詩人・文人が輩出し、勅撰漢詩文集も編集された。嵯峨天皇・空海・橘逸勢は唐風の書をよくし、三筆といわれた。(54 ページ)
				三蹟	技巧的な和歌の発達にともなって、書道も、力強い唐風から優美な和様へ変わった。中でも小野道風・藤原佐理・藤原行成は三蹟と称えられた。(59 ページ)
3	1996年 平成8年	高校 日本史 B	実教出版	三筆	書道では、嵯峨天皇・空海・橘逸勢が唐風の書の模範として、三筆とたたえられた。(35 ページ)
				三蹟	書道も、力強い唐風にかわって優美な和風が好まれ、小野道風・藤原佐理・藤原行成が三蹟とたたえられた。(39 ページ)

三筆三蹟はなぜ三筆三蹟なのか
 (1) 三筆三蹟の語られ方について

4	1996年 平成8年	日本史A	東京書籍	三筆	この時期には、嵯峨天皇の宮廷を中心として文人たちが輩出した。なかでも、嵯峨天皇と空海・橘逸勢は唐風の書にすぐれ、三筆と称せられた。(178ページ)
				三蹟	なし
5	1997年 平成9年	詳解 日本史B	三省堂	三筆	書ではのちに三筆とよばれる嵯峨天皇・空海・橘逸勢があらわれ、唐風の書を発展させた。(48ページ)
				三蹟	仮名文字の普及は書風を和風へと変化させ、のちに三蹟とよばれる小野道風・藤原佐理・藤原行成らの名筆家が生まれた。(56ページ)
6	1999年 平成11年	詳説 日本史	山川出版社	三筆	唐風の書道(唐様)ももてはやされ、嵯峨天皇・空海・橘逸勢はその名手として三筆とよばれた。(64ページ)
				三蹟	屋内の調度品にも、日本独自の発達をとげた蒔絵の手法が多く用いられ、はなやかななかにも落ちついたおもむきをそえた。書道も、前代の唐様に対し、優美な線をあらわした和様が発達し、小野道風・藤原佐理・藤原行成の三蹟とよばれる名手があらわれた。それらの書は美しい草紙や大和絵屏風などにも書かれ、調度品としても尊重された。(73ページ)
7	2012年 平成24年	詳説 日本史	山川出版社	三筆	書道では、唐風(唐様)の書が広まり、嵯峨天皇・空海・橘逸勢らの能書家が出て、のちに三筆と称せられた。(57ページ)
				三蹟	屋内の調度品にも、日本独自に発達をとげた蒔絵の手法が多く用いられ、華やかななかにも落ち着いた趣きをそえた。書道も、前代の唐風の書に対し、優美な線をあらわした和様が発達し、小野道風・藤原佐理・藤原行成の三蹟(蹟)とよばれる名手があらわれた。それらの書は美しい草紙や大和絵屏風などにも書かれ、調度品としても尊重された。(67ページ)
8	2012年 平成24年	新日本史	山川出版社	三筆	書道は、唐の影響が強く、とくに唐中期以降の新しいたっぷりとした書風をとり入れ、空海をはじめ、嵯峨天皇・橘逸勢らは優れた書を残し、あわせて三筆と称された。(71ページ)
				三蹟	書道では、優美な曲線で端正な姿の和様が生まれ、小野道風・藤原佐理・藤原行成の三蹟(蹟)が出た。とくに藤原行成は、中国の書家王羲之の書法を消化し、和様書道を完成させて、その子孫は世尊寺流とよばれ能書の家となった。「屏風土代」(道風)、「離洛帖」(佐理)、「白氏詩卷」(行成)などの名品がある。(85ページ)
9	2012年 平成24年	高校 日本史	山川出版社	三筆	なし
				三蹟	なし
10	2014年 平成26年	新選 日本史B	東京書籍	三筆	貴族たちは儒学や漢文学を学び、勅撰の漢詩文集が編集された。唐風の書道もさかんで、空海、嵯峨天皇、橘逸勢は三筆と称せられた。(45ページ)
				三蹟	漢字を優美な線で書いた和様の書が尊ばれ、かつての唐様の三筆に対して、小野道風、藤原佐理、藤原行成を三蹟とよんだ。(55ページ)

三筆三蹟はなぜ三筆三蹟なのか
(1) 三筆三蹟の語られ方について

備考（本文以外の補足的説明文）

- ・ 3 三筆 風信帖（空海）
- ・ 5 三蹟 藤原佐理の「離洛帖」（写真あり）
- ・ 9 三筆 風信帖 三筆のひとりである空海が最澄におくった自筆の手紙で、冒頭の文言「風信雲書・・・」からこの名がついた。筆跡に唐風のきびしさが感じられる。（京都府、教王護国寺蔵）（47 ページ）（写真あり）
- ・ 9 三蹟 離洛帖 三跡（蹟）のひとり藤原佐理の書状。冒頭に「（佐理の花押）謹言。離洛之後・・・」とあるところから名づけられた。47 頁の「風信帖」と見くらべてみよう。（東京都、畠山記念館蔵）（57 ページ）（写真あり）
- ・ 10 三筆 風信帖（東寺）空海から最澄にあてた漢文の書状。（写真あり）

これらを概括すると、教科書においては一般的に、三筆は「力強い唐風の書の名手」、三蹟は「優美で端正な和様の書の名手」と説明されているといえるだろう。ただし、説明はそこまでで、それらのことが歴史的な事実（評価）であったとしても、なぜそうなのかは不明である。もちろんこれらは日本史の教科書であり、書道（史）の教科書ではない。記述に当てられる文字数も限られており、かつ、名手である理由まで詳細に記すことは求められていないであろう。従って、これら教科書の記述が不備であるわけではない。

それでは、日本史ではなく書道の教科書においてはどうか。やや古い資料になるが、日本放送協会学園（現学校法人 NHK 学園）の書道の教科書には、

この期（〔平安時代初期〕）は晋唐風の大成をなした時代で、その代表者が三筆と称せられる嵯峨天皇、空海、橘逸勢です。この三筆につぐのが最澄です。〔中略〕

書も王羲之一派の晋唐風の書風に日本的情致、国民性を加味し、同化して豊満で柔かく暖かい書風をつくりあげたのです。世にこれを和様（または和様体）と称しています。漢字における中国の様式を唐様といい、これと区別して日本様式の書を和様とよんでいます。この和様をよくした人に代表的な三人がいます。平安時代の書のホープ、小野道風、藤原行成、藤原佐理で、この三人は三跡と呼ばれています⁽¹⁾。

とある。ここにはさらに、それぞれの能筆の関連事項や仮名文字普及に関した言及など、日本史の教科書よりは詳細な説明がなされている。また、大学の書道講座での使用を想定して作られた教科書では、

平安時代は、日本書道の確立期に当たり、その基本的書風は現代に根強く生きている。また、漢字の草書を極度に省略化した仮名という独自の書体が生まれた時代である。ただし、遣唐使の派遣が中止されるまでは、前時代に引き続いて中国の書法が継承された。その頂点には三筆（嵯峨天皇、空海、橘逸勢）が位置し、王羲之を主流とした伝統的書風の中に温雅な風韻をかもした。〔中略〕嵯峨天皇より約一世紀を経た醍醐天皇の〈白氏文集〉は、和風の線質が加わり、和様書道の成立期に至ったことを物語る。やがて三跡（小野道風、藤原佐理、藤原行成）の時代になると、まず道風の〈玉泉帖〉や〈屏風土代〉が和様の滑らかな線質で唐風の鋭利な感触を払拭した書風を見せ、仮名の隆盛とともに日本書道独自の流麗な筆運びにつながる。次いで行成が道風を範とし、道風の緩やかな線に緩急の速度と抑揚を加え、ここに和様の姿が確立された⁽²⁾。

と、歴史的な経緯、社会的な背景など、三筆・三蹟に関連する、より詳細な説明がなされている。しかしながら、中国の書風を継承した頂点に三筆が位置していたとは書かれてい

三筆三蹟はなぜ三筆三蹟なのか
 (1) 三筆三蹟の語られ方について

るが、なにをもって頂点と判断されたのか、なぜ他の能書ではなく、空海らが三筆なのかは記されていない。また、書の名手を「能書」といい、後述する平安時代から南北朝時代にかけて著された書論『夜鶴庭訓抄』『筆法才葉抄』『入木抄』には約 40 人の能書が記されているが、その中でもなぜ小野道風、藤原佐理、藤原行成が三蹟なのかの理由も記されていない。つまり、三筆・三蹟がなぜ別格なのかは記されていない。

これについては、記さないのではなく、記せないのではないかと考えられる。春名好重によると、

嵯峨天皇・空海・逸勢は当時能書として最もすぐれていた。それ故、三筆といわれている。しかし、嵯峨天皇・空海・逸勢が三筆といわれるようになった事情はわからない。また、いつごろから三筆といわれたかということもわからない⁽³⁾。

とされている。春名が書いている「当時能書として最もすぐれていた」も史料において確認されること、いわば伝聞であろう。したがって、このように断定できるか検討が必要かと考えられるものの、空海らが三筆となった「事情」の部分、さらには小野道風らが三蹟とされた理由を直接的に確認できる史料は、これまで見つかっていない。そのため、春名が言う通り「わからない」のである。

2. 史料における「三筆」「三蹟」の使用と今後分析が必要な部分

それでは、わかる部分があるとすればそれはどこまでのことだろうか。「三筆」「三蹟」及び「三賢」などの言葉（呼称）や、その他「三賢」のような、別格的に扱う周辺的な言葉が歴史的にいかに使われたかは史料において確認できる。これについて、いつ、どこで、どのような言葉が使用されたのか、次の〈史料一覧〉は、いくつかの先行研究の調査結果・指摘を私がまとめたものである⁽⁴⁾。

〈史料一覧〉

	書名	成立年	著・話・選者	記述
1	政治要略	1008 年 寛弘 5 年頃	惟宗允亮	『政治要略』には、空海・道真・道風を「三生」といっている。道真は空海の「違世之身」であり、道風は空海の「順世之身」であるという。それ故「三聖」は「三生」の誤りである。
2	江談抄	1105 年 長治 2 年頃	大江匡房	「天曆皇帝、道風朝臣を召し、勅して云はく、『我が朝の上手は誰人や』と。申して云はく、『空海・敏行』と」とある。(『新日本古典文学大系 32 江談抄 中外抄 富家語』岩波書店、1997 年、46～47 ページ) 「兼明・佐理・行成の三人は等同の手書きなり」(同前、47 ページ)
3	夜鶴庭訓抄	1168 年 仁安 3 年～1177 年 安元 3 年の間頃	藤原伊行	「弘法 天神 道風 三聖の由世事要略に見ゆ」(平勢雨邨他『精萃図説書法論 第九卷』西東書房、1991 (平成 3) 年、152 ページ)
4	筆法才葉抄	1177 年 安元 3 年	藤原教長	「弘法 天神 道風 三聖の由世事要略に見ゆ」(平勢雨邨他『精萃図説書法論 第九卷』西東書房、1991 (平成 3) 年、152 ページ)

三筆三蹟はなぜ三筆三蹟なのか
 (1) 三筆三蹟の語られ方について

5	愚秘抄	平安後期 ～鎌倉前期	藤原定家	「三跡とは野跡道風、行跡行成、佐跡佐理の三也」と書いている。行成の筆跡は「権跡」といわれている。「行跡」とはいわない。
6	夜鶴書札抄	1179年 治承3年 ～1255年 建長7年	藤原行能	空海・道風・道真を「三賢」といっている。『筆法才葉抄』に、嵯峨天皇・空海を「二聖」といっている。
7	入木抄	1352年 正平7年	尊円親王	野跡・佐跡・権跡、此三賢を末代の今にいたるまで此道の規模としてこのむ事、面々彼遺風を模する也 (「野跡」は道風の筆跡、「佐跡」は佐理の筆跡、「権跡」は権大納言行成の筆跡)
8	麒麟抄	南北朝期	不明	三賢を「三宗」といっている。ほかに三宗といったということは見えない。
9	新札往来	1367年 貞治6年	僧素眼 (素阿)	道風・佐理・行成を「三賢」といっている。
10	実隆公記	1474年 文明6年 ～1536年 天文5年	三条西実隆	「自伏見殿三蹟以下手本櫃一合被贈下・・・」とある。
11	尺素往来	1481年 文明13 年以前	一条兼良	「道風・佐理・行成三賢」とある。
12	梅庵古筆伝	～1596年	大村由己	道風・佐理・行成を三跡と称す、と書いている。
13	和漢名数	1678年 延宝6年	貝原益軒	本朝能書三筆 嵯峨天皇 橘逸勢 僧空海 【三跡】道風 佐理 行成 (貝原益軒『和漢名数』『貝原益軒全集 卷之二』国書刊行会、1973(昭和48)年、842ページ)
14	万宝全書 (卷五 本朝古今公書流学能書目録)	1694年 元禄7年	菊本幸甫斎賀保	「本朝三筆 嵯峨天皇 橘逸勢 弘法大師 本朝三蹟 小野道風 参議佐理 大納言行成」とある。
15	書言字考	1698年 元禄11 年	榎島昭武	「本朝三筆、嵯峨帝、橘逸勢、釈空海」とある。
16	弁疑書目録 卷之下	1710年 宝永7年	中村富平	空海・道風・佐理・行成を「本朝四墨」といっている。ほかに本朝四墨は見えない。
17	和漢三才図会	1712年 正徳2年	寺島良安	嵯峨天皇・逸勢・空海を「三筆」

三筆三蹟はなぜ三筆三蹟なのか
 (1) 三筆三蹟の語られ方について

18	〔和漢音 釈〕書言字 考節用集	1717年 享保2年	榎島昭武	嵯峨天皇・逸勢・空海を「本朝三筆」
19	槐記	1724年 享保9年 ～1735年 享保20 年	近衛家熙	享保十二年（一七二七）八月十二日条に「世ニ佐理・道風・行成ヲ三跡ト云フ。此三跡ノ字ハモト御堂殿ヘ渡御ノトキヨリ初メテ云ヒ習ハセシコト也。此トキ、御堂殿ノ献上ニ、佐理ト道風トノ筆跡ノ巻物ヲ献ゼラレシガ、今一卷ヲ行成ニカ、セテ、梅ノシモトニ付ケテ上ラレシヨリ、世ニ此ヲ三跡ト云ヒシコト、御記録ニアリ」と書いている。
20	近代世事談	1734年 享保19 年	菊岡沾涼	「三筆、嵯峨帝、弘法大師、但馬守橘逸勢」とある。
21	筆蹟流儀系 図	1858年 安政5年	古筆了仲	「本朝三筆 嵯峨天皇 弘法大師 橘逸勢 本朝三蹟 小野道風 野跡と唱 参議佐理卿 佐跡と唱 藤原行成卿 権跡と唱」とある。

それでは、このような言葉の使用について、先行研究ではどのように分析されてきたのか。例えば三蹟について飯島春敬は、

道風、佐理、行成が当時の代表的書家の位置にあったことは認められるが、三蹟の名をもって称したことは、平安中期にはその例がない。末期に至り教長口伝書の如く、道風、佐理、行成の三人をあげているから、この三人を併称してとり上げることは、もはや一般的であったかも知れない。鎌倉時代に入れば、尊円親王の入木抄に、野跡、佐理、権跡と呼び、三賢ともいっているから、「三蹟」という言葉こそ見当たらないが、事実上この三人の組合せは通行していたと思われる。「三蹟」なる語は、江戸時代の元禄、享保の頃に成った前述の節用集に至ってはじめて表われているのである⁽⁵⁾。

と説明している。要するに、平安時代の「三蹟」は江戸時代に使われ始めたが、その三人の組み合わせは江戸時代以前から一般的であった、というのである。また、三筆について角井博は、

三筆の呼称がいつからはじまったものなのか、正確なところは分からないが、江戸の中期ごろ、さかんに、かれら三人を三筆と唱えていたことは間違いのないようである。それは、出版事業が盛んに行われた江戸中期ごろ、作品の遺っていない小野美材を除いた三人を、三蹟に対抗して並称したのかもしれないし、あるいは、もう少しさかのぼって、古筆家あたりの人たちが、あくまでも三蹟に拮抗させた趣味的な呼称として、三筆の尊称を考え出したのかもしれない。三筆の名称はいずれにせよ、かれら三人が能書家として並称されるようになったのは、やはり当時におけるかれらの能書活動が一段と図抜けており、すぐれた遺品が流伝していたからにはほかならない⁽⁶⁾。

と説明している。こちらもまた、「三筆」は江戸時代から、しかも「三蹟」の後に使われ出したというのである。

飯島や角井の見解は、先に示した史料一覧に沿っているといえるであろう。ただしそれは、「〔菅原〕道真」「三聖」「〔藤原〕敏行」「兼明〔親王〕」「三賢」などの情報を、事実上捨象した上で成立する見解となっている。例えば「三賢」について、春名は、

三筆三蹟はなぜ三筆三蹟なのか
(1) 三筆三蹟の語られ方について

小野道風・藤原佐理・藤原行成の三人は当時第一の手書きとしてすぐれていたばかりでなく、三筆にまさるとも劣らない能書である。それ故、三筆に対して三賢といわれた。そして、三筆以上に尊重された。三賢以後は三賢の書風が流行し、三筆の書風は行われなかったから、三筆よりも三賢が尊重されたのである。三賢の書のうち、道風の書を野跡といい、佐理の書を佐跡といい、行成（権大納言）の書を権跡という。野跡・佐跡・権跡を三跡というのである。すなわち、三跡は書であり、三賢は手書きである。はっきり区別すべきであるが、このごろは三賢を三跡といっている。そのため、俗に従って三賢を三跡ということにする(7)。

として、「三跡」との本来の意味の違いを指摘している。同様の指摘は田村悦子からも次のようになされている。

『入木抄』には三人について「三賢」という語を用いてあった。そこで反省してみると、三蹟という詞は、野蹟・佐蹟・権蹟の三つを一まとめにしたいい方で、三者はそれぞれ小野道風の書蹟、藤原佐理の書蹟、権大納言藤原行成の書蹟という意味（行成の行を用いて「行蹟」というよび方もあった。『愚秘抄』上にみえている）、すなわち作品をさしたるのであって、道風・佐理・行成の人その人をさした語ではない。これらの三人すなわち道風・佐理・行成の人その人を指すには、かつて別に「三賢」という語がちゃんと存していたわけである。『入木抄』に限らず『才葉抄』（群書類従本）・『新札往来』『尺素往来』などにもみることができる。ところがいま、三賢の語はあまり用いられず、人をさして三蹟と称する傾きのあるのは、厳密に言えば誤用にほかならないが、大分広く用いられていることであるから、広義に拡張されたものとして許容するのもやむをえないであろう(8)。

つまり、「三蹟」は「書」もしくは「作品」、「三賢」は「手書き」もしくは「人」を指すというのである。これらの違いからすれば、「三賢」が即ち「三蹟」であるとは限らない。なぜならば判断の基準、評価の対象がそもそも違うからである。しかし両者の違いが看過され、「三賢」が含んでいたのであろう人格的な意味は薄れ、書の作品としての質的な意味を主とした「三蹟」の使用が主流となった。

その過程について、〈史料一覧〉をみると、13の貝原益軒の『和漢名数』が「三筆」の使われ出した最初の頃の史料となっているのであるが、先に飯島や角井が指摘していたように、それ以前から小野道風、藤原佐理、藤原行成は「三跡」とされてきた。つまり、「三筆」と「三蹟」は、その一般的な認知の成立過程においては「三蹟」が先であり、この三人よりもさらに昔の能書として、後になって「三筆」が誕生した。現在一般的に、これらを一括して「三筆・三蹟」と呼称するが、成立の順番からすると、「三蹟・三筆」だったと考えられるのである。そうであるとすれば、「三筆・三蹟」の呼称は、実際のそれらの呼称の成立課程に即してではなく、一般的な歴史的流れを基準に採用した結果になっているといえるであろう。

さらに別の疑問もある。それは、能筆でも三筆・三蹟に位置づけられなかった理由についてである。具体的には、例えば最澄、小野美材、菅原道真について、

空海は当時から書名が高く、嵯峨天皇も影響を受けるほどの実力。〔中略〕しかし、嵯峨天皇や橘逸勢は伝わっている作品があやふやで、橘逸勢にいたっては生年や業績すら資料が残っていません。こうなると最澄の方が名僧としても、書人としてもふさ

三筆三蹟はなぜ三筆三蹟なのか
(1) 三筆三蹟の語られ方について

わしいのでは？と書いてしまいます。そもそもこの三人は嵯峨天皇の時代、宮城の門額を書いた人物（空海・嵯峨天皇・橘逸勢・小野美材）から選ばれています。嵯峨天皇は唐風好みなので、門額を書き改める時には晋唐風の文字が書ける能書を指名したのでしょう。空海も橘逸勢も唐に渡って勉強していますし、小野美材は醍醐天皇時代には大嘗会で能書が務める「悠紀主基屏風」を書いたと伝わりますので、みな相当の書き手だったのです。日本書道史の中には最澄のように、三人に括られない能書もたくさんいます。学問の神様・菅原道真もその一人。平安末期の書論『夜鶴庭訓抄』に、空海、小野道風ともに能書の人々として名が挙がっているものの、三筆、三蹟のどちらにも入りませんでした。書の神としても崇められているのに、です。鑑賞の比較図版を見てみると、三筆は晋唐風の書きぶりに魅力があり、三蹟は線の柔和さが魅力です。道真は作品が残っていないこともありますが、ちょうど三筆と三蹟の過渡期にいたために入らなかったのかもしれない。“三筆”とは同時代的、または同じ括りで活躍する三人がちょうどよいバランス感覚で並べられるところに意味があり、面白さもあります(9)。

という指摘がある。これは、本論で注視している「能筆なのになぜ三筆・三蹟から一線を画されたのか」という疑問の立脚点は同様であろう。だが、この指摘では、時代的な状況や並べ方の「バランス感覚」に答の理由を求めようとしている。このように、三筆・三蹟の共通点からなんらかの区別の基準を導きだして説明を試みる研究は他にもある。

例えば最澄について、堀江知彦は、王羲之以外の書の影響もみられる三筆とは異なり、最澄は「純粹に王羲之一辺倒で、〔中略〕これは、最澄その人が学究であって芸術家ではなかったことを示す、とも解されよう」(10)と指摘している。また、石川九揚は、「最澄は何ゆえに、三筆に入らなかったのか」という章題のテキストにおいて、「三筆の書は、いずれも。雑体書という奇怪な表現を伴っており。その奇怪な雑体書の表現によって初めて、三筆でありうる。〔中略〕最終画を点状に書いたりというような、いくぶんか特異な表現が、最澄になかったわけではないが、その程度がきわめて軽微であるという点において、三筆とは一線を画している」(11)と解説している。

本論は実践的な知見に基づいた論拠をもたないため、書法・書体など揮毫の実践的なそれにもとづいた堀江や石川の説、別格である三筆（や三蹟）の基準を推測した説の妥当性を判断することはできない。本論でおこないたいのは、「三筆」「三蹟」という呼称ができて、他の能書を三筆・三蹟から区別（分節）する記号として作用したという指摘である。そこで、堀江や石川の節とは違う分析、先に提示した〈教科書一覧〉にもどって、そこにある記述の特徴を分析・検討したい。

[本論つづく]

註

- (1) 天石東村監修『書道講座 日本書道史』日本放送協会学園、1982（昭和57）年、18・26ページ。
- (2) 全国大学書道学会編『書の古典と理論』光村図書、2013（平成25）年、136ページ。
- (3) 春名好重『平安時代の書の研究』芸術新聞社、1999（平成11）年、36ページ。
- (4) 作成にあたり使用した主な先行研究は以下の三つである。

三筆三蹟はなぜ三筆三蹟なのか
(1) 三筆三蹟の語られ方について

- ・春名好重『平安時代の書の研究』。
 - ・小松茂美『日本書流全史（上）』講談社、1970（昭和45）年。
 - ・角井博「三筆小考－文献にみる三筆の学書並びに交誼資料」『MUSEUM：東京国立博物館研究誌（183）』、1966（昭和41）年。
- (5) 飯島春敬「三蹟の書」『定本書道全集 第9巻－三筆・三蹟とその時代－』名著普及会、1980（昭和55）年〔河出書房新社、1954（昭和29）年刊の複製（監修：尾上八郎ほか）〕、180ページ。
- (6) 角井博「三筆小考－文献にみる三筆の学書並びに交誼資料」、5ページ。
- (7) 春名好重「三跡以後」『墨美』No.230、1973（昭和48）年4月、3ページ。
- (8) 田村悦子編・文化庁他監修『日本の美術 第122号 三蹟 道風・佐理・行成』至文堂、1976（昭和51）年、18ページ。
- (9) 編集部「The 三筆 こぼればなし」『墨 特集：The 三筆（214）』芸術新聞社、2012年1・2月号、66ページ。
- なお、この指摘が、本誌特集の中心的な論文においてではなく、「こぼればなし」というコラム的な欄に書かれて、余談的・参考的な扱いとなっていることに、これまでの書学において、三筆・三蹟をめぐる不透明な問題が中心的なテーマになってこなかったことがうかがい知れる。それはこの問題を疑問に感じることは特別なことではないが、史料において確認できない論件は、別の手段を講じるなどしてそれ以上追求することはされてこなかったということであろう。
- (10) 堀江知彦「日本の書(三)－三筆時代」『歴史教育』、1965（昭和40）年5月、107～108ページ。
- (11) 石川九楊『日本書史』名古屋大学出版会、2001年、100ページ。

なお、本論中〔 〕カッコは古市による。